
-恐怖夜話-

水樹裕

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

一恐怖夜話一

【Nコード】

N4367B

【作者名】

水樹裕

【あらすじ】

ごく当たり前の日常の影に潜み、じわりじわりと浸食する恐怖――。そんな恐怖の体験を、貴方もちょっとだけ、覗いてみませんか？
★ホラーシーズンなので、復活してみました。

1 前書き

はじめまして。Nと申します。

私は、とあるホラー雑誌の編集をしている者です。

所謂『読者の恐怖体験』を文章に纏めて雑誌に掲載するわけですが、やはり明らかに『ネタ』だろうと思われるものも少なくはないです。

ですが、やはり中には確かに『本物』も存在するのです。

ごく当たり前の日常の影に潜み、じわりじわりと浸食する恐怖――。

そんな恐怖の体験を、貴方もちょっとだけ、覗いてみませんか？

2007年1月22日 N

2 ブランコ

十二月二十四日 水曜日

―PM11…00―

今日は彼女にとって、最悪な一日だった。

仕事上でのケアレスミスが重なり、細々とした事務処理に思いの外時間がかかってしまった。それで結局、帰宅がこんな時間になってしまったのだ。

人気の無いローカル線の無人駅で電車を降りたのは、彼女一人。薄暗い蛍光灯の明かりが人の気配の全くない闇の中に、ぼんやりと古びた駅舎の姿を浮かび上がらせていた。

「もう、最低っ……」

心細さをうち消そうと、わざと声に出して呟いたその息が白い。

ジンと染み込むような冷気に、彼女はぶるっと身震いをして、コートコートの襟をかき寄せた。

彼女の名前は、鈴木すずき絵美。

二十三歳のOLで、地元の短大を卒業した後、やはり地元の中堅の建築会社に就職し、事務の仕事をしていた。

いつもなら遅くても夜八時には帰宅していた。

別に彼女が真面目一辺倒な訳ではなく、土地柄、夜の女性の一人歩きがタブー視されていたのだ。

駅の周りは畑と雑木林で囲まれていて、視界が通りにくい。

俗に言う『痴漢多発地帯』で、駅のそこそこには『痴漢注意!』

の立て看板が五月蠅うるせいくらいに立っていた。

「どうしようかな……」

家に電話して、兄さんに車で迎えに来てもらおうか？
でも、明日の仕事が早番だったら、もう寝てるしなあ……。

彼女は、家に続く真つ暗な細い砂利敷きの道路を眺めながら、家に電話をするかどうか迷った。

父親は三年前に病気で他界していて、母親はほとんどペーパードライバーで夜の運転はしない。迎えに来て貰える選択肢としては、二つ年上の兄・敏広としひろしかないのだが、兄は仕事柄早番と遅番があって、早番の時はもう寝入っている時間だった。

『美人OL・残業帰りに暴行・絞殺！』

縁起でもない週刊誌の見出しが、脳裏に浮かんでは消える。

「よし。兄さんには悪いけど、電話しちゃおう！」

彼女は、お気に入りの明るい茶色のハンド・バックから携帯電話を取り出し、短縮に入れてある自宅の番号を押した。

プルルルッ。

プルルルッ。

呼び出し音ばかりが、妙に暗い駅舎に鳴り響く。いつもなら遅くても五コールもすれば、母親が電話に出るのに、今日は一向に出ない。

「……もう、寝ちゃったのかなあ」

いつもなら、彼女が遅くなるときは母親が起きて待っていてくれ

た。

この物騒な世の中、大事な娘に何かあっては大変だと、彼女の『駅まで迎えに来てコール』を受けるため、待っているのだ。

それが、今日是一向に電話に出る気配が無い――。

家までは自転車で十五分。

駅舎の周りには閑散として人気は全くないが、五百メートルも行けばぽつりぽつりと少ないながら民家がある。

よし！ と自力で帰ることを決意し、携帯を切ろうとしたそのとき、『ぶちっ』と電話が繋がる音がした。

あ。繋がった！

彼女は慌てて、下げかけていた携帯電話を耳にあてた。

「もしもし、お母さん？ 絵美だけど……あれ？」

確かに繋がったと思った携帯からは、何の音も聞こえてこない。普通は聞こえてくる、相手の周りの雑音すら聞こえない。

全くの無音――。

「もしもし？ もしもし？」

彼女は携帯の終了ボタンを押して、もう一度自宅へダイヤルしてみた。

「あれ？ 電池切れじゃ……ないよね？」

耳に当てた携帯からはやはり、何の音も聞こえてこない。

「もうっ。携帯まで壊れたの!？」

電池マークも十分残っているし、アンテナも綺麗に三本たっている。考えられる原因は、携帯電話自体の故障しかない。駅の公衆電話は、もう一ヶ月も前から『故障中』の張り紙がしてある。

『はぁーっ』と大きな溜息をついて、彼女は駅舎の外にある薄暗い自転車置き場に向かった。

「お化けなんてないさっ。お化けなんてうそさっ」

彼女は、幼い頃から怖いときに歌う童謡を、ペダルを踏むリズムに合わせて口ずさみながら、頼りないヘッドライトだけを頼りに、自転車をこいでいた。

見える範囲にまだ民家は無い。雑木林の黒い木立ちが飛ぶように彼女の視界の端を過ぎていく。

と、その右側の視界に何か白いものが入った。暗闇にチラチラ浮かぶ、白い影。

うわっ……。見ない見ない。何も見ない。

彼女は気付かないふりを決め込んで、そのままペダルを踏み込んだ。正にその時、ライトの明かりの中を右から左へ何か小さい黒い影が『ビュン』と横切った。

轢いちゃう!

夜の静寂に響き渡るブレーキ音。

彼女はバランスを崩して派手な音を立てながら、自転車ごと砂利道に倒れ込んだ――。

「っ痛ーいっ」

砂利ですりむいた膝と肘のズキズキする痛みには呻きながら、自転車のライトに照らされた範囲を見渡す。＜KBR＜見える範囲に、倒れている小動物はいない。

彼女はほっとして、自転車を起こしにかかった。

――ぎいっ。

不意に、耳に飛び込んできたその音に、彼女の動きがピタリと止まった。

――ぎいっ……。ぎいっ……。

ごくりと唾を飲み込んだその音が、やけに響く。

彼女は、さっき視界をかすめた『白い影』を思い出していた。

実は彼女は視界に飛び込んできた瞬間に『それ』がなんであるか認識していた。

ただ、あまりにもこの状況にそぐわないので、意識的に気が付かないと思うことにしたのだ。

それは――。

ゆっくりと振り返った彼女の視線の先。

鬱蒼うつそうと茂る林の中、三角形の白いものがゆらゆらと揺れていた。

闇の中なのに、光源など無いはずなのに、そのプラスチックのつるんとしたパイプの質感まで、手に取るように分かってしまう。

『子供用ブランコ』

屋根に付いた、やはり白いピニールの幌が、ブランコが揺れるたびに、ひらひら、ひらひらと、はためいていた。下の方は、枯れた草が猥雑に絡み合い、見えない――。

ただ、ブランコの上の部分がぎいぎいときしむ音を闇の中に響かせて、揺らめいているのが見えた。

風など吹いていない。

ブランコがあるのは、鬱蒼うつそうとした雑木林の中。

誰かが乗っている筈などない――。

だめだ。

逃げなくちゃ、だめだ。

頭はそう命令するのに、身体が金縛りにあったように動かない。視線を逸らしたいのに、ただその光景に見入っている彼女がいた。

ぎい　い　い　い　い　っ　……。

一際大きな音が響いたその後、ブランコがピタリと止まった――。

がさっ。と下草が揺れる。

がさっ。がさっ。がさっ。

草を踏み分ける音と共に、何かが近づいてくる。

いや。

がさっ、がさっ、がさっがさっ。

もう、『それは』彼女の目と鼻の先まで来ていた。

いやっ！

草の音が止む。

一分。二分。

永遠とも思える時間だけが過ぎていく。

ゴクリー。

彼女が唾を飲み込んだその瞬間、ツンと、コートの裾を引かれた。

「いっしょに、のろうよ」

妙にトーンの高い子供の声。

白い、子供。

青白いような肌をした小さな男の子が彼女のコートの裾を引っ張っていた。

冬だというのに、半袖半ズボン姿で、にっこりと笑顔を浮かべている。

でもその目は……ただ闇色に染まっていた。その中で不気味に光る赤い点。

それが見る間に大きさを増していく。

ニタリ。

「いっしょに、の・ろ・う？」

ぷっつ——

と、電源が切れたように、彼女の意識はそこで途絶えた——。

「絵美！ 絵美！ どうした！？ しっかりしろっ！」

彼女は、聞き覚えのあるその声で覚醒した。

ゆっくりと、痺れたようになっていた五感が戻っていく。

「兄さ……ん」

兄の敏広の心配げに覗き込む顔を見て、一気に感情が溢れ出す。

「兄さんっ！」

やっとその時、凍り付いてしまっていた彼女の涙が溢れて頬を伝った。

兄の腕にしがみつきながら、まるで子供のように泣きじゃくる。

「どうしたんだ？ 変な電話は掛けてくるし、心配になって来てみれば道路の真ん中に倒れてるし」

「えっ？」

彼女は、自転車で倒れたまま砂利道の真ん中で気を失っていたのだ。

恐る恐る確認した雑木林の中にはどこにも『子供用ブランコ』は無かった。

駅で自宅へ電話を掛けたとき彼女には何も聞こえなかったが、電

話を受けた兄の方ではちゃんと聞こえていて、彼女の態度を不審に思った。

それで心配になって車で様子を見に来たのだった。

『もしかしたら、駅に着いた時から、何者かの力の支配下に入っていたのかも知れないと、彼女は思った。

母親や兄は、『気を失っている間に夢を見た』と言って、真面目に取り合ってくれなかったが、彼女にはあれが夢だとは思えなかった。

その後彼女は、帰宅が遅くなるときには必ず、『電車に乗る前に帰るコールをすることになっている。

未だに、『あれ』が何だったのか正体は分かっていない。

—おわり—

3 冷蔵庫

一月三十一日、木曜日。

佐藤弘恵さとうひろえは、二十歳にして経験する初めての一人暮らしに、心を躍らせていた。

やっと就職先が決まり、長いアルバイト生活に終止符を打つことができたのだ。

この日は母親と一緒に、一人暮らしに必要な家財道具を購入するため、新居のアパートの近所にあるリサイクルショップに買い出しに来ていた。

テレビ・洗濯機・コタツにガスコンロ。あらかたのものは揃った。くあと、必要なのは――。

「ねえ。この冷蔵庫、いいんじゃない？」

母親が指をさしたのは、白い冷蔵庫。

ツードアで、サイズも一人暮らしには丁度良いコンパクトなものだった。

「うーん。どうしようかな……」

「だって、安いわよ。これで二千円はお買い得じゃない？」

確かに、他に比べると格段に安い。

傷や目立った汚れはなく、見た目も綺麗だし、母親の言う通り買い得な感じがした。

「中はどうかな？」

弘恵は中を見てみよう、冷蔵庫のドアに手を掛けてぐっと引っ張った。が、ドアはびくとも動かない。

「あ、あれ？　開かないよ？」

今度は力を込めて引っ張ってみたが、やはりドアが開かない。

「あ、それ、脇にドア開き防止用のフックが付いているんですよ」

不意に後ろから掛けられた声に思わずドキリとして、母親と二人同時に後ろを振り返った。

「ほら、ここにフックがあるんですよ。きっと、小さいお子さんがいた家庭で使われていたんでしょうね」

黄色い太陽のマークが入った、店のロゴ入りの妙に派手なエプロンを付けた中年の店員が、二人の間から手を伸ばして、冷蔵庫の扉の上部に付けられていた黒いフックをカチャリと外す。

「どうぞ。中もご覧になって下さい。とてもお買い得な商品だと思いますよ」

勧められるまま、弘恵は冷蔵庫のドアに手を掛けた。

――パタン。

軽い音を響かせて、ドアが開く。そして一瞬漂う、鼻を突く異臭。

何の匂い？

「あら。何か臭うわね？」

年の功か、オバタリアンの性^{さが}か、店員をはばかり、その匂いのことを口に出さなかった弘恵とは対象に、母親が大きすぎる眩きを漏らした。

「ああ。これはアルコールの匂いですね。一応クリーニングしますので、その時に消毒に使ったアルコールが残っていたんでしょう。何、すぐにこの匂いは消えてしまいますよ」

「あら、そうなの」

母親が冷蔵庫に顔を近づけて、くんくんと鼻を鳴らす。

「ほんとね。もう気にならないわね。どう、弘恵。これにしちゃったら？」

「う……ん。そうだね」

特に理由はなかったが、弘恵は何となく気が進まなかった。

「あの。何でこの冷蔵庫だけ、こんなに安いんですか？」

弘恵は、心に引っかかっていたことを、素直に質問してみた。もしかしたら、何か欠陥があるのかも？ そう思ったのだ。

「ああ。単に、仕入れ値が安かったんでしょう。うちは、仕入れ値に一律の金額を加算して販売していますので」

ニコニコと愛想のいい笑顔を見ていたら、何となく買わなくてはいけない気がしてきた。どうも、この手のセールスに弱い。

これじゃ、押し売りなんて断れないなあ。

弘恵は心の中で苦笑いをした。

「じゃあ、これにします。車なので、配送はいいです」

「はい。かしこまりました。では、お車までお運びしますね」

こうして、最後の家電製品の冷蔵庫も購入し、弘恵の花の一人暮らしが始まった。

「じゃあ、お母さん帰るわね。何かあったら、すぐに電話しなさいね」

「うん。分かった。今日は、ありがとうね。気を付けて帰ってよ」

午後七時。

もうすっかり日も暮れて、住宅街からは少し離れた造成地に建っているアパートの周りは、人通りもなくシンと静まり返っている。アパートの裏手にある駐車場まで母親を見送り、笑顔で別れを告げると、弘恵はやっと一段落付いてほっとした。

母親の手伝いのお陰で、予算内で全て収まった。

リサイクルで家電や家具類を揃えたのが大きかった。

新品の方が良いに決まっているが、しがないアルバイト生活では

大した貯金があるわけでもなく、『人の使った物が嫌』と言うほどの潔癖性でもないので、『これで良しとしよう!』と弘恵は自分を納得させた。

二回の東の角部屋。

日当たりも風通しも抜群で、内装も綺麗にリフォームされていた。

「うーん。これが我が城かあ」

弘恵は改めて、玄関から室内を見渡した。

六畳の洋室十四畳半の和室。決して広くはないが、初めての一人暮らしには十分だと思った。

「さて。夕飯にするか」

今日の夕飯は、コンビニのソバ。ちょっと味気ないが、これも一人暮らしの醍醐味と、弘恵は六畳の洋室の小さなキッチンの脇に並べて置いた冷蔵庫に手を掛けた。

「あれ? 開かない。お母さん、フックしていったのかな?」

冷蔵庫のドアの右上に付いている黒いフックが掛かっていた。

「子供がいるわけじゃないから、フックは掛けなくてもいいわね?」

買い出ししてきた食材を入れるとき、確かに母親はそう言っていたはずだ。

「お母さん、ボケが入ったかな?」

クスクスと笑いながら、カチャリとフックに右手を掛ける。瞬間
チクリと、指先に鋭い痛みが走った。

「痛っ!？」

パタパタと、フローリングの床に赤い点が散る。

弘恵は慌てて、ティッシュで指を押さえた。

恐る恐る傷口を確認する。

小さな引っ掻き傷が、右手の薬指と中指の内側に斜めに走っていた。

じわりと血がにじみ出してきた、もう一度ギュッとティッシュで傷口を押さえる。

「何? 何に引っ掛かったの？」

フックの周辺を念入りにチェックしたが、特に引っ掛かりそうな場所はない。左手の指先でフックの周りをそつとなぞってみたが、やはりそれらしいものはなかった。

「おかしいなあ……」

右手の指先の傷の血はすぐに止まったが、念のため傷絆創膏を貼っておくことにした。中指と薬指に一本づつぐるっと絆創膏を巻く。それを眺めて、一つ溜息をついた。

何だかなあ……。

不可解ではあったものの、それ以上悩んでも答えが出るわけでもないの、気持ちを切り替えて冷蔵庫からソバと缶ビールを一

缶取り出し、部屋の真ん中に鎮座するコタツに陣取る。

食事をすませ、そのままごろりと横になってテレビを見ながら、いつの間にかうつらうつらと寝入ってしまった。

どれくらいたっただろうか。弘恵は、ふと、目を覚ました。

一瞬、どこにいるのか分からずに混乱したが、すぐに自分のアパートだと気が付いた。

背筋がゾクゾクした。

やばっ……。風邪引きそう。ちゃんと布団に寝なきゃ……。

そう思いながらも、コタツにずぶずぶと首まで潜り込み『もうちよつと、暖まってからにしよう』とうずうず考えていた。その時だった。

カチャリ……。と、音がした。

えっ？

不意に響いた金属音に、視線だけを部屋中に巡らす。

カチャリ……。と、音がした。

又、音がした。

何の音？ 弘恵はその音に聞き覚えがあるような気がした。

カチャ、カチャ……。と、音がした。

何か、小さな金具。そう、例えばあの冷蔵庫のフックを外す音……

…。

そう思った週間、弘恵の視線は冷蔵庫に釘付けになった。

冷蔵庫の扉が半開きになっている。

テレビの明かりだけが、微妙な影を刻む薄暗い部屋の中。暗いフロアリングの床に、冷蔵庫の明かりが妙にくっきりと光と影のコントラストを描き出していた。

そしてその上部。

そう、あのフックが、カチャリ、カチャリと一人で動いていた。

いや、違う――。

黒いフックが動いたたび、何か白いものがチラチラと蠢いた。弘恵は、瞬きも出来ずにその光景に釘付けになった。

そして、だんだんと、その蠢くものの正体が分かってくる。

「ひっ……」

指だ。

小さな、子供の指。

それが、カチャリ、カチャリと、冷蔵庫の中からまるで遊んでいるかのように、黒いフックを弄んでいた。

動けない。

視線を逸らしたいのに、金縛りにあったように、身体がぴくりとも動かない。

すうっと、音もなく冷蔵庫のドアが開いていく。

ダメ。

ひとり――。何者かの足音が耳に届く。

来ないで。

ひとり。ひとり。

姿は見えない。

でも、弘恵は『何か』が確実に自分の方に歩み寄って来るのを感じた。

フーフーと言う、荒い自分の呼吸音だけがやけに大きく響く。

ヒヤッつと背筋に悪寒が走ったその瞬間、耳に届いた声。

「だしてよ、おかあさん」

薄れゆく意識の下で弘恵は、確かにその声を聞いたように思った。

「何それ？ 本当なの？」

翌朝、弘恵は目覚めるとすぐに実家に電話をして、母親をアパートに呼んだ。そして、昨夜あったことを一部始終話して聞かせた。

「本当よ！ こんな事で嘘なんかつかないよっ！」

顔面蒼白で、冷蔵庫を薄気味悪そうに見詰めながら話す娘の様子に、さすがのリアリストの母親もただならぬものを感じたのか、「分かったわ。じゃ、あの冷蔵庫、今から返品しに行こう」と腰を上げた。

「ええ？ だってもう使っちゃったよ？」

「中は汚れていないでしょ？ 大丈夫、お母さんにまかせなさい」

結局、昨日買ったばかりのその冷蔵庫は、元のリサイクルショップで引き取って貰う事になった。帰り際、母親がそれとなく店員に『冷蔵庫の元の持ち主』のことを尋ねて見たが、詳しいことは分らなかった。

ただ、今にして思えば冷蔵庫を買うときに確かに店員はこう言っただのだ。

『小さいお子さんがいた家庭で使われていたんでしょう』と。

小さい子供が『いる家庭』ではなく、『いた家庭』――。

それは、今は子供がいらないと言うことではないのか？ それとも、ただの言葉のあやか？

あのフックは、本当に『子供の悪戯防止用』だったのか？

弘恵に、確かめる術^{すべ}はない。

ただ、あの『だしてよ、おかあさん』と言う子供の声。

どこか哀しい響きを持ったあの声を、しばらくは忘れられそうになかった。

—おわり—

4 自動販売機

その日は二月にしても、特別に寒い日だった。

午前二時。

気味の悪いほどの青白い満月が、田圃たんぼの中、真っ直ぐ続く広い農道に、煌々とした光を投げかけていた。

車の代行業を初めて半年。

夜の車の運転にも大分慣れたなと思いつつ、田口勝たぐちまさるは快調に車を走らせていた。

遠方の客を家まで送り届けた帰り道。

田舎の一本道には対向車も無く、月の光が黒々とした山陰を浮かび上がらせている。

薄気味悪い夜だな。狐か狸にでも化かされそうだ……。

勝は心のなかで一人ごちると胸ポケットをまさぐり、片手で器用に煙草を一本取り出して口にくわえた。

いつもの勘で、手元を見ることがもなくシガーライターに手を伸ばし、ポンと押し込む。

助手席にチラリと視線を走らせると、今日の相棒の坂崎守さかざきまもるが、カーラジオから聞こえる音楽を子守歌にして、気持ちよさそうにいきをかいて眠っていた。

不況の余波で、この代行業も随分と売り上げが落ち込んだ。数年

前に施行された代行業の許可登録制度も、それに拍車を掛けていた。乗客を乗せるタクシー業には普通免許の他に二種免許が必要だが、その必要がない代行業は、急なリストラで路頭に迷うところだった勝には救いの主だった。

女房とまだ幼い二人の子供を抱えた一家の大黒柱。

三十歳と言う年齢を考えれば、もっと堅実な仕事を見付けた方がいいのだが、妙にこの仕事が性に合っていた。

昼勤の普通のサラリーマンから夜勤の代行業への転職は、確かに最初は辛かったが、慣れればどうと言うことはなかった。何よりも、対人関係のストレスがサラリーマン時代とは比べ物にならないくらいに減ったのだ。

たまに、質の悪い酔っぱらいに当たって手こずる事はあっても、営業で胃薬を飲みながら接待浸けの毎日を送っていた事を思えば、何でもなかった。

カチッ。

シガーライターの鳴る音にはっと我に返る。

危ない危ない。

いくら空いた道でも、油断は禁物。

夜道を飛ばして走る代行業者が起こす事故は、大きくなりがちで、悲惨な死亡事故も少なく無かった。勝は、背筋をぐっと伸ばして、前方に意識を集中した。

しばらく行くと前方数十メートルほど先、道路の左端にポツンと

ジュースの自動販売機が立っているのが見えた。

そう言えば、喉が渴いたな……。

急に、何か飲みたい衝動に駆られた勝は、バックミラーで追従車がないのを確認して、自動販売機の前にずっと車を止めた。

「おい、坂崎。自販機があるけど、何か飲むか？」

一応、声を掛けてみたが、熟睡してしまったのか、坂崎は相変わらず高いびきで眠っていた。

まあ、いいか。

勝は、ズボンのポケットに小銭が入ってるのを確認して、車の外に出た。

ヒヤリ……。

暖かい車内から出た途端に、ぞくぞくっと寒さが背筋を這い上がってくる。

「うわっ、こりゃ寒っ……」

呟いた息が、白い。

路肩の土には霜柱が立っていて、歩くたびに『ざくっざくっ』と音が上がった。

こりゃあやっぱり、ホットコーヒーにするかな。

そんなことを考えながら、自動販売機の前に立って百円玉を投入口に入れようとしたその時、

こつ、こつ、こつ――。

靴音が、聞こえた。

「え……？」

一瞬、聞き違いかと思って、勝は耳を澄ました。

こつ、こつ、こつ。

やはり、靴音だ。

昔、サラリーマン時代に良く聞いた音。
革靴。それも、女性のハイヒールがアスファルトを歩く時に発する独特の靴音。

勝は、ぐると周りを見渡した。

ちらり、と、視線の端に何かが引っ掛かった。前方だ。

車のヘッドライトに照らされた前方から、女が歩いて来る。

ぼんやりとして良く見えないが、OL風のスーツを着たハイヒールを履いた女のシルエットだけが、浮かび上がった。

ゆっくりと、勝の方へ歩いて来る。

「な、何だあ？　こんな真夜中に、こんな人気の無い農道を、何でOLが歩いてるんだ？」

あまりにも非常識なその光景に、ジュースを買うのも忘れて勝は見入ってしまった。

徐々に女が近づいてくる。

ゴクリーー。

唾を飲み込む音が、シンとした闇夜にやけに大きく響いた。

こつ、こつ、こつ。

そのスピードは一定で、遅くも速くもない。

近づいてくる。

確実に、女は近づいて来ていた。

白っぽいスーツのスカートの裾が、ひらひらと閃いていた。

女の顔の輪郭が浮かび上がる。

笑っている。

見えないのに、何故かそう確信した。

ふわふわと、歩きたびに軽やかに舞い上がる、ウェーブの掛かった長い髪。もう、すぐそこまで来ている。

ヤバイー。

そこで初めて、勝の脳裏にチラチラと危険信号が点滅した。

慌てて逃げようとした。だが、地面に縫いつけられたように足が動かない。

こつ、こつ、こつ、こつ、こつ。

だ、だめだっ！

勝が、ギュツと目を瞑った瞬間、パパーッ！ と、耳を劈くようなクラクションの音が夜の静寂に鳴り響いた。

「田口さんっ！ 早くっ！」

その叫び声に、勝は一気に呪縛が解けた。すぐそこまで来ている女には目もくれずに、一目散に車に駆け込む。

間髪を入れずそのまま急発進をし、スピードをぐんぐん上げていく。思わずチラリと視線を走らせたバックミラーには、自動販売機の前に佇む白い人影が見えた。

「田口さん！ 田口さんっ！」

「え？」

「スピードを落として、もう大丈夫ですよ」

「あ。ああ……」

坂崎の声に、勝は踏み込んでいたアクセルをゆっくりと戻した。

もう、バックミラーには、自動販売機は見えない。

対向車とすれ違い、人家がちらほらと視界に入る。そこで、やつと勝は大きく息を吐いた。

「なあ、坂崎。さっきの、あれ……見たか？」

「……ええ。見ました」

薄気味悪そうに答える坂崎の表情を、バックミラー越しにチラリと見やる。

「俺には、白いスーツを着た若いOLに見えたんだが、お前は何に見えた？」

「女？ 女に見えたんですか！？」

「ああ。髪の毛の色までくつきりと見えたよ……」

「俺には、白っぽい影のようにしか見えなかったんですけど……」

「けど？」

「白いハイヒール。それだけがやけにはっきり見えたんですよ……」

思い出したように坂崎が『ぶるっ』と、身を震わせた。

「目が覚めたら車が止まって、田口さんはいない。ひょいと横を見たら田口さんがボウツと突っ立って前を見詰めてる。んで、俺もそっちを見てみたら、白いハイヒールだけが闇にチラチラ浮かび上が

って近づいてくる。もうこりゃあヤバイつつんで、クラクションを鳴らしたんですよ」

「そうか……。ありがとう、お陰で助かったよ」

もう二度と、こんな思いはゴメンだ。もう、このルートを使うのは絶対止めようと勝は固く心に誓った。

「でも、あんな所で何をしてたんすか？」

「えっ？ 何って、喉が渴いたから、自販機でジュースでも買おうと思って……」

「……田口さん」

言い辛そうに口ごもった後、坂崎が口を開いた。

「さっき、田口さんが立っていた所に自販機なんか無かったですよ」

「えっ……？」

「あそこに立っていたのは、お地藏様です……」

後に勝は、昔その界限で、銀行強盗に連れ回された女性行員が惨殺されたのだと言う噂を聞いた。

だが、その行員があのだったのかは分からなかった。

ただ、あれ以来、代行の仕事の時は必ず自前の水筒を用意して、

決して自動販売機で飲み物を買う事はなかった。

—おわり—

5 一記念写真

「きゃあ、何これえ!?!」

放課後の教室で、志賀雅美はすつ頓狂な声を上げた。

京都への修学旅行で撮った写真を仲良しグループ三人で持ち寄って、焼き増しする枚数を書き出している時だった。机を二つ寄せてめいめいに、『あの時はこうだったなあ』などと思い出に浸りながら写真鑑賞をしていたのだ。

他の生徒は帰ってしまっていて、教室にはこの三人だけしかない。

残りの二人が、雅美の声のボリュームに驚いて顔を見合わせた。

「雅美、どうしたの!?!」

「なににに!?!」

顔面蒼白でぶるぶる震えている雅美のただならぬ様子に、リエと若菜が心配げに、その顔を覗き込んだ。

「そ、その写真見て、何だか変だよ!?!」

机の上に放り出した一枚のスナップ写真を雅美が指をさした。

その指も、ぷるぷると小刻みに震えている。

「どれ? この三人で滝の前で撮った写真?」

うんうんと、雅美が大きく首を振る。

リエがその問題の写真を持ち上げて、若菜と二人まじまじと覗き込んだ。

この日は薄曇りの、あまりはつきりしない天候だった。

有名な観光スポットの大きな滝をバックに三人が思い思いのポーズを決めて頭を寄せて、笑顔全開で写っている。

そこにはなんの暗さも感じられない。ごく普通のスナップ写真だ。

「えーどこ? 何も写ってないじゃん?」

半信半疑と言った様子で、リエが眉をひそめながら写真に視線を這わせる。

でも、何も変わった所は見付けられない。

「雅美ったら、私たちを驚かそうとしたんでしょ？」

若菜も写真に落としていた視線を雅美に向けると、可笑しそうにクスクス笑いを漏らした。

「ち、違うよ。よく見てよ！ 私たちの後ろ、私とリエの間！」

「えっー？」

雅美の悲鳴のような声に、二人がもう一度写真に視線を戻した。

『雅美とリエの間』を注意して念入りに見詰める。

一秒。

二秒――。

妙に長く感じる、静かな時間が過ぎていく。

えっ……？

じいっとその一点を見つめていた二人の表情が同時に凍り付いた。ばつと二人が顔を上げてアイコンタクトを取る。

『見た！？』と、無言のうちに二人同時に心の中でそう叫んでいた。

「……ね？ それって、変だよね？」

ごくりと唾を飲み込み、雅美が続ける。

「あの時は自由行動で私たちは三人一緒だったし、写真も三人で交換で取り合うか、誰かに撮って貰うかしかにしてないよね？」

そのセリフに、リエと若菜が『うん』とゆっくりうなずいた。

確かに雅美の言う通り、写真に写っているのは、通行人を省けばこの三人の中の組み合わせしかない。

他の『誰か』を交えて撮った記憶は、三人には全く無かった。

「じゃあ、これ……。私たちの後ろに写っているこの女の子、誰……なの？」

呟く雅美の声は恐怖で掠れ、震えていた。

その恐怖が伝染してしまったのか、金縛り状態のぎこちない動作で、三人はゆっくりと写真に目を向けた。

薄曇りだったので、確かに昼間なのにフラッシュがついたと思う。滝の細かい雫だろうか、無数の丸い光が画面一杯に散らばっている。

左から背の高いショートヘアの雅美。

真ん中が少しぼっちゃりで肩口までのストレートヘアのリエ。右端がセミロングの若菜。

その雅美とリエの間に、もう一人いる。

元気にピースサインを送る雅美が上げた腕に隠れるように、密かに佇む少女。

よく見ると、雅美たちとは違うデザインのセーラー服を着ている。

長いストレートの黒髪。

青白いような肌。

血の気のない、引き結んだ口元。

目元は雅美達の体に隠れて見えていない。

はつきりとした顔かたちが判別出来る訳じゃない。

でも、だれもこの少女を知らないと言うことだけは、紛れもない事実だった。

「こ、これってまさか……」

——心霊写真じゃないよね？

雅美がその言葉を飲み込む。

言葉にしてしまったら、それが現実になりそうで、この言いようのない恐怖心が暴走してしまいそうで、怖かった。

「きゃっ！」

リエが小さく声を上げると、掴んでいた写真を机の上に放り投げた。

そのまま持っている、『何かが』乗り移ってきそうな気がしたのだ。

乗り移る？

リエはなんでそんなフレーズが浮かんだのか、ふと不思議に思った。

その時だ。

がらり！

勢いよく入り口の扉が開いて、三人は文字通り飛び上がった。

「何してるの？ もうとっくに下校時間は過ぎたわよ」

「せ、先生ー！！」

担任の山吹礼子のきびきびした声に、三人の悲鳴のような声が重なる。

礼子は何事かと歩み寄って、机の上を覗き込んだ。

「あら、修学旅行の時の写真ね？ 良く撮れてるじゃない」

そう言いながら礼子が手に取ったのは、一番上に置いてあった『例の写真』だった。

三人が固唾を飲んで見守る。

そのただならぬ気配に、礼子が目をしばたかせた。

「え？ 何、どうしたの？」

「せ、先生ー。その写真可笑しいんです！」

「えっ？」

三人の説明を聞き終わった礼子は、もう一度写真を注意深く見てみた。

確かに三人の他に見知らぬ少女が写っている。

だが、それだけの事だ。

おそらくは、近くにいた茶目っ気のあるこの少女が、悪戯心で入り込んだのだろうと思った。

まあ、それにしても、随分暗い表情ではあるが――。

「ほら、別に気にするような写真じゃないわ。怖い怖いと思って見ると、怖く感じてしまうものよ」

ね？

と、まだ怯えた様子の三人に、礼子が笑いかける。

だが、三人にしてみれば『絶対の確信』があるわけだから、一度芽生えた恐怖心をそう簡単に拭えるはずはなかった。

「そうね……」

押し黙ってしまった三人を見詰めながら、礼子は心の中で軽く溜息を付くと、努めて明るく話し掛けた。

「分かったわ。先生の知り合いにこう言うのに詳しい人がいるから、見て貰ってあげるわ。この写真は、先生が預かる。だから、心配しないでもう帰りなさい」

今時、人間の方がよっぽど怖いんだから。

ね？

と、再び笑い掛ける。

「先生がそう言うなら……」

雅美の呟きにリエと若菜がゆっくり頷く。

「はい、万事OK、心配なし！ 遅くならないうちに帰りなさい！」

礼子の檄げきに三人は不安気ではあったが、取り敢えず、その気味の悪い写真を持って帰らずに済むことに安堵した様子で、下校して行った。

そして、その写真は礼子の手元に、残されたのだった。

「やれやれ……」

三人を見送った後礼子は、既に人気のない職員室に戻り、自分の指定席に座ると、『ふう』と一つ長い溜息をついた。

頬杖について、さっき預かった『例の写真とネガ』に実に嫌そうに視線を落とす。

生徒達にはああは言ったが、実際『この手の話』は得意じゃない。いや、はっきり言えば、嫌いだ。

特に靈感が有るわけではないが、『君子、危うきに近寄らず』が、モットーなのだ。

こう言う胡散臭い話には、出来ればお近付きにならないに越したことはない。

「しゃーない。あいつに頼むか」

不本意丸出しでそう呟くと、他の職員がいないのを確認して、机の一番下の引き出しの化粧ポーチから、自分の携帯電話を取り出した。

さて。

いざ掛けようとしたその時、「山吹先生ー」と声を掛けられ、慌てて携帯電話を上着のポケットに突っ込む。

職員室での私用電話は、一応禁止されているのだ。

と言っても、みんな適当に上手く隠れて使っているのだが――。

「ねえ、今日コレ行かない？」

視線を巡らせると、ドアの所で仲の良い英語教諭の市川香かおりが、カラオケマイクを握る真似をして笑顔を浮かべていた。

「え？ うーん。今日は、どうしようかな……」

いつもなら二つ返事でOKする。でも今日は例の写真の件があった。行きたいのはやまやまだが、どうしたものか。

礼子は少し迷った。

「何？ 彼氏とデートでもあるの？」

「ないない！」

あいつに相談するのは、また今度にしよう。

結局、誘惑には勝てず、礼子は写真を持ったままカラオケに行くことになった。

午後八時。

カラオケボックスの狭くて薄暗い室内は、ノンアルコールにも係わらず、雰囲気だけで盛り上がった若い女教師二人の賑やかな独壇場と化していた。

「でさ、教頭が言う訳よー。『市川先生、いくら英語の先生でも居住まいは大和撫子であって欲しいものですね』ウォッホン！」

ウーロン茶を一口ぐびっと口に含んで、香が堅物教頭の声真似をして見せる。

「やだ、似てるー！」

トンと、コップを戻した小さなテーブルの上には、所狭しとおつまみのとその残骸が並んでいた。

英語教師の香は、いわゆる『トランジスター・グラマー』で、いつも体にぴったりしたミニ一步手前のスカートをはいている。

今日は、そのミニ度が大きかったらしく、教頭のイヤミの洗礼を受けたのだ。

「何それー？ いい大人にスカートの丈が短いって？ さすが、堅物教頭！」

体育教師の礼子自身は、色気のないジャージ姿で過ごすことがほとんどなので、幸い個人的に何かを言われた事はなかったが、教頭が煙たい存在には変わりがない。

「で、山吹先生は今日、何かなかったのー？」

「え？ うーん……」

香の言葉に礼子は、『例の写真』の事を思い浮かべた。

——そう言えば、あの写真とネガ、持ってきてるのよね……。

ソファの端に置いてある、自分のバックにチラリと視線を向ける。

「ん？ どうしたの、突然黙り込んで」

「あ、実はね——」

あまり楽しい話題ではない。

でも。

『話したい』

礼子は何故か無性に、あの写真の事を話したい衝動に駆られた。まるで、何かに急ぎ立てられているような感覚。

礼子は、今日の放課後の出来事を香に話し始めた。

「うひゃー、何それ。本当なの？」

香はテーブルの方に身を乗り出すと、気味悪そうに眉根を寄せた。その顔には『半信半疑』と言う文字が張り付いている。

「見てみる？」

礼子が上目使いに、誘いの言葉を掛ける。

「う、うーん。どうしようかな……」

「何、怖いのか？ 市川先生って、幽霊とか信じる人なんだ？」

「うーん……」

興味はあるようなのに、煮え切らない態度の香に、礼子は少し揶揄^ゆするような言葉を投げ付けた。

この時礼子は何故か無性に、あの写真を香に見せたかった。

なのに当の本人は見たがらない。

何だよ！？

見せてやるって言ってるんだから、見れば良いんだよ！

イラッ！ っと、礼子の中に、今までに感じたことが無い感情が湧き上がった。

「いいから、見てよ！」

礼子が声を荒げる。

それは、怒声そのものだ。

礼子の急激な変化に香は、あっけにとられて顔色を無くしている。そんな香の様子も気に止めず、礼子はがさがさと乱暴な動作でバックからあの写真を取り出すと、テーブルに叩きつけた。

「ほら、ここ！ここに女の子が写っているのよ！」

「あ……、うん」

礼子の勢いに気圧されながら、香は渋々と礼子の指さす写真に視線を落とした。

瞬間、香の口から「ひっ!？」っと、息を飲む声が漏れる。

「な、何、この、写……真……」

香が、震える細い声を絞り出した。

両手で自分の体をギュッと掻き抱いて、顔面蒼白になっている。一方、写真を香に見せたことで、さっきの妙なイライラが嘘のように消えてしまった礼子は、香の様子に首を傾げた。

「何って、知らない女の子が写っているだけでしょ？生徒達は、

心霊写真じゃないかと疑ってたみたいだけどね」

礼子はそう言って軽く肩をすくめた。

「……山吹先生」

今まで見たことが無いほど真剣な香の表情に、ただならぬ物を感じて、礼子は息を飲んだ。

「な、何？どうしたの？まさか市川先生まであの子達と同じ――」

そこで、礼子の言葉は止まった。

香が、テーブルの上の写真を礼子に見えるように、差し出したのだ。

写真が目に入った瞬間、礼子の顔から表情が消えた。

見覚えのある女生徒三人の、楽しげなスナップ写真。

肩を寄せてピースサインをする二人の間に、

何かが居る。

逆立ち、まるで蛇が群がるようにウネウネと画面一杯に広がる長い髪。

細面の、青いような白い顔。

異様に大きな赤い唇は、色彩の少ない画面の中で、妙に鮮やかで、
禍々しい。

その口が、『ニタリ』と笑っていた。

そして――。

画面一杯に広がった黒髪の中に

無数の滝の飛沫。

いや、違う。

顔だ。

大小様々な、顔。顔。顔。顔――。

恨み。

妬み。

嫉み。

憎悪。

憤怒。

その一粒一粒に、強烈な念が込められていた。

違う。

これは、あの時見た写真じゃない！！

バチバチッ。

不意に上がった怪奇音に、礼子と香はギョツと互いの顔を見合
わせた。

部屋の中には、予約を入れておいた曲が、この場の雰囲気とは不
釣り合に明るくポップなメロディラインを刻んで流れていく。

二人は耳をそばだてた。

我知らず、『ゴクリ』と唾を飲み下す。
その刹那。

プツンと、部屋の明かりが落ちた。

「え!?!」

「何!?!」

二人が、ぎよっと腰を浮かしかけたその時、はっきりと声が聞こえた。

妙にトーンの高い、少女の声――。

『シ……ネ……』

その後すぐさま、学校で写真の相談の電話を掛けようとしていた、お寺の跡取り息子の従兄に電話を掛けて、カラオケボックスまで来て貰った。

礼子も香も、腰が立たなくなってしまったのだ。

「全く、こう言う物をむやみやたら持ち歩くからこうなるんだよ」
ムツとしてそう言う従兄に「あははは……」と乾いた笑いを返し
ながら礼子は、一番気になった事を聞いてみた。

「その写真って、やっぱり心霊写真なの?」

「……まあな。人間じゃない物が写って居ることは確かだろうな。
それにしても……」

言い淀む従兄の顔に、一瞬、礼子が今まで見たことが無い表情が
浮かんだ。

それは確かに『恐怖』の表情――。

「俺も坊主なんて職業柄こう言う写真を何度か見たけど」
「見たけど?」

「こんなに禍々しい写真は初めてだよ」
そして、次に従兄の口から発せられた言葉に、礼子は震撼した。

「お前、取り殺されなくて、良かったよ」

触らぬ神に祟りなし――。

もう二度と、この手のことには首を突っ込むまいと、礼子は固く心に誓ったのだった。

――おわり――

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4367b/>

-恐怖夜話-

2010年10月10日20時42分発行